木の目草の芽

2017年12月11日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込：047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便振替00180-4-710688
加入者名：川口章子

〈基調講演の清水講師に、全国集会の感想を綴っていただきました〉

日本山岳会自然保護全国集会に参加して

清水　政美

日本山岳会岐阜支部より依頼を受けて、山岳自然保護の立場から、現在問題となっている外来種、特に外来植物による山岳地域の生態系への影響について問題提起する機会を得た。岐阜県には、御嶽山や乗鞍岳など全国的に知られた３０００m級の高山が数個あり、周年登山客で賑わっている。これに伴って、富士山などの例に漏れず、外来植物が亜高山帯から高山帯にかけて侵入してきている。これに追随して、外来昆虫などの動物たちも高山帯に侵入してきている。これらの外来種が、本来の高山帯の生態系にどのような影響を及ぼしているのか、未だ明らかになっていない。我々は今、断片的であっても様々な情報を得、可能な限りこの目でその現状を見てみることが大切である。これによって、少しでも山岳地帯の自然保護に貢献できるであろう。このような考えの下、岐阜市から最も近い位置にある伊吹山（標高１３７７ｍではあるが、高山性植物の生育する山塊）にスポットをあて、伊吹山での外来植物の現状と問題点を紹介するとともに、現地での勉強会にお誘いし、各個人に考えて頂くよい機会となった。

初日の特別講演においては、思いもよらなかった多くの皆さんの関心を得たことに満足するとともに、外来種による生態系への影響に今まで全く関心のなかった会員が、これを機会に勉強したいと仰（おっしゃ）っていたことが印象的であった。また、分科会で紹介したＰＰＴ（パワーポイント）の中の外来植物を地元で探してみたいのでＰＰＴを下さいという熱心な方もおられ、感激しました。分科会では、いったん進入し繁茂した外来種は駆逐することがほぼ不可能であるという話に、絶望感を抱いた会員が多くいたことも、これまた印象的であった。今ここで「絶望しないで下さい！」と呼びかけます。確かに、絶滅させることは難しいかもしれませんが、これ以上増や

第１３０号
～全国集会報告号②～
〈目　次〉

P.1　自然保護全国集会に参加して　清水 政美
P.3　フィールドスタディ報告　下野 綾子
……
P.4　自然観察会報告
第３回　小峰公園　川口 章子
第４回　横沢入り　小原 茂延
P.6　尾瀬保護財団ボランティアに登録して　吉田 理一
P.8　シカを見たらスマホで送信　～委員会からの提言～

さない、広げないことで、現状は維持できるはずです。少なくても、これ以上悪化しなければそれでよしとしようではありませんか。

二日目の現地観察会では、多くの方が伊吹山での外来種の現状を目の当たりにし、外来種の驚異を感じて頂けたのではないでしょうか。頂上の山小屋の周辺にはセイヨウタンポポが群落を形成していましたね。このような状況になると手のつけようがなく、現状では対策が採られていないということです。この観察会では、外来種のみでなく、伊吹山に生育する高山性の植物を数多く観察でき、いつもの登山の楽しみを満喫されたのではないでしょうか。

今回の集会で、多くの方が外来種による生態系への影響に関心を持って下さったことにこの上ない喜びを感じるとともに、自然保護への大いなる期待が膨らんだことにさらなる喜びを感じているところです。

（一般財団法人自然学総合研究所
主任研究員）

＜当日のパワーポイントから＞

伊吹山で確認された外来植物－１－

● ： 1977年に13科46種（伊吹山総合学術調査報告書）

イネ科 ： イヌムギ、オオアワガエリ、カモガヤなど9種
タデ科 ： エゾノギシギシ、ツルドクダミ、ヒメスイバの3種
ヒユ科 ： ノゲイトウ、ホソアオゲイトウの2種
ナデシコ科 ： マンテマモドキの1種
アブラナ科 ： オランダガラシ、ハタザオガラシの2種
マメ科 ： イタチハギ、シロツメクサ、ニセアカシヤなど6種
フウロソウ科 ： ヒメフウロの1種
トウダイグサ科 ： オオニシキソウ、コニシキソウの2種
アカバナ科 ： アレチマツヨイグサの1種
アカザ科 ： ケアリタソウの1種
ゴマノハグサ科 ： オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリの2種
オオバコ科 ： ヘラオオバコの1種
キク科 ： アメリカセンダングサ、セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポ
ヒメジョオンなど15種

山頂付近の要注意外来種

ハルザキヤマガラシ

オオアワガエリ

オニウシノケグサシ

セイヨウタンポポ

伊吹山で確認された外来植物－２－

● ： 2013年に18科49種（2013年度外来植物侵入追跡調査報告書：伊吹山ネイチャ-ネットワーク）

イネ科 ： オオアワガエリ、カモガヤ、メリケンカルカヤなど7種
タデ科 ： エゾノギシギシ、ヒメスイバの2種
ナデシコ科 ： オランダミミナグサ、コハコベ、スイセンノウの3種
アブラナ科 ： セイヨウアブラナ、ハルザキヤマガラシなどの3種
マメ科 ： シロツメクサ、ムラサキツメクサ、アレチヌスビトハギなどの4種
トウダイグサ科 ： オオニシキソウ、コニシキソウ、ハイニシキソウの3種
アカバナ科 ： アレチマツヨイグサの1種
ゴマノハグサ科 ： オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、オオカワヂシャ3種
オオバコ科 ： セイヨウオオバコの1種
キク科 ： アメリカセンダングサ、セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポ
ヒメジョオンなど12種
その他、アヤマ科、オトギリソウ科、カタバミ科、シソ科、ナス科、ヒルガオ科、ヤマゴボウ科、ユリ科の計11種が確認された

外来種の繁茂状況－例－

ハルザキヤマガラシ

フランスギク

フィールドスタディ報告：伊吹山

報告　下野　綾子

清水政美先生の基調講演によると、織田信長は伊吹山に薬草園を開園し、ヨーロッパから持ち込んだ三〇〇〇種もの薬草を栽培したという。現在、当時の薬草のほとんどが消滅し、三種のみが現存しているという。この話を聞き、「テン（一〇）ルール」を思い出した。昨今は、意図的にせよ非意図的にせよ、世界中で多くの外来生物が各国に持ち込まれている。それら人為的に持ち込まれた動植物のうち、人の世話なく野外で定着できるものは一〇分の一程度という報告がある（この野外で定着したもののうち分布を拡大できるのは、さらに一〇分の一程度とされている）。

伊吹山では三〇〇〇種も持ち込まれ（この数は誇張されており、実際はもっと少なかったのでは、と清水先生はお話されていたが）、野生状態では三種のみ残存できたという実例が、定着に成功する外来種はごく一部だというルールを実証しているようで心に残った。その三種とはキバナノレンリソウ、イブキエンドウ、イブキカモジグサだ。

フィールドスタディでは実際にキバナノレンリソウを観察することができたが、日本の在来植物と言われても何の違和感もなく、そこの風景によくマッチしていた。

一方で、清水先生の講演では、伊吹山では多くの外来植物の侵入が問題となっているとのことであった。外来種の数は四九種にものぼるという。ハルザキヤマガラシ、オオアワガエリ、オニウシノケグサ、セイヨウタンポポ、ハルジオン、ヒメジョオン、エゾノギシギシ、コメツブツメクサ、ホソムギ、シロツメクサ、タチイヌノフグリ、オランダミミナグサなど、私達の身近に見られる外来種ばかりである。これらは数多く持ち込まれる外来種の中で、色々な障壁を乗り越え分布拡大に成功したごく一部の分類群ともいえる。

私の伊吹山を歩いての感想は、こういった外来種は、人が攪乱した場所に生育しているということだ。人が攪乱した場所とは、登山道沿いや、休憩場所などの開けた場所だ。多くの場合、人が外来種の入り込む場所を作りだしているともいえるが、人の利用を排除することは非現実的であり避けえない。これらの外来種が登山道沿いや、休憩場所のみに留まったまま、在来種と競合することがないよう祈るばかりである（といっても、登山道を外れて歩くことはできないので、実際に人の踏み込まない場所に外来種が入り込んでいるのかどうかは分からないが・・・）。

標高が一三七七メートルにもかかわらず、高山草原が発達し、類稀な景観を楽しませてくれる伊吹山。この景観が将来にわたって登山者を楽しませてくれますように。

（自然保護委員）

委員会主催自然観察会報告

▼第３回　春の自然観察会（４月１１日）
東京都あきる野市五日市町
「小峰公園コース」

春風と春の息吹を自然観察を楽しみながら体感しましょうと呼びかけた里山ハイキングコース。

４月22日（日）武蔵増戸駅９時に集まったのは７名と少人数、でも、初めて参加の一人が「とても楽しみにして参加しました。おおくの事を知りたい」と学習意欲いっぱいの自己紹介の挨拶に励まされて少数だからこそ講師の説明がよく聞こえ、質問もしやすいと参加者は喜んだ。

準備を整え歩き始めようとした時、講師の廣田自然保護委員は、集合場所の樹を見上げ説明を始めた。街路樹は同じ種類の樹が植えられているところが多いが、ここの街の街路樹は種類が多くとても覚えきれなかった。

武蔵増戸駅から山田大橋まで10分くらのところを40分近くかけての樹と草の観察だった。

秋川にかかる網代橋を渡り網代弁天山を目指す。教えてもらった樹、草木の名前の復習、再確認と意欲のある参加者である。雑木林の中に貴志島神社が見え、岩の露出した前でここが弁天洞窟だと教えられる。言われて、よく見ると入り口があった。今日の持ち物に“懐中電灯“持参とあったのはこの洞窟のためだったと知る。

洞窟は、五日市第３世紀層に空いた洞窟で、壺型土器や明銭などが出土し、古代・中世には霊場とし祭祀をしていただろうとのこと。足場の悪い入り口から交代で恐る恐る入る。目が慣れてくると、奥に高さ35センチくらいの石作りの大黒天と毘沙門天が安置されているのが確認できた。

洞窟から昼食の場所、網代城山へ急な階段を降り江戸時代の山城の本丸跡で昼食。

雑木林のナラ、クヌギ、アオキ、アセビ、アカシデ、いろはもみじ、オトコヨウゾメ、エゴノキ、草木などを観察ながら高尾の集落を抜け秋川橋を渡り武蔵五日市駅で解散となった。

五日市は都心からわずか60キロの所。化石と地質の宝庫でもあり山々に囲まれた小さな盆地。気持ちの良い春風に吹かれての観察会、参加者一同春を楽しみました。

（自然保護委員　川口　章子）

▼第４回　秋の自然観察会（11月３日）
東京都あきる野市
「横沢入り」

11月３日は気象上の特異日でもあり、素晴らしい快晴の日に恵まれた。集合場所の武蔵五日市駅に午前９時集合、川口委員長の第４回となる観察会挨拶、講師の廣田博自然保護委員から資料の配布、加えて登山の安全に必要な小パンフ、有用グッズの進呈はサプライズであった。なお、地元多摩

支部の北原、小河女史がサブで付いてくれるといい、総勢11人の参加というメンバー数は説明を受けるには理想的な構成の観察会となった。

「横沢入り」は、東京都里山保全地域指定の第1号と案内にもあったが、開発計画を市民で守った歴史があったとのことである。横沢入りに向かう路傍の野草から観察は始まり、花の終わりかけたセンニンソウを先ず説明、ボタンヅルとの見分け方は葉の切れ込みなどと丁寧である。カラムシの茎の皮を剥ぎ、繊維にする利用の仕方、織って加工するのを福島で見聞したなど講師の該博な知識に聴き入る。林道の入り口に崩落があってルートの変更を余儀なくされたが、そのお陰か、スズランの黄色く色づいた葉と赤いキレイな実を見ることができ、更にその先でノブドウの実のあえかな色合いを愛でる。又、近くにお住いの本多会員とも出会って同行して頂き、地元に密着した苦労話なども伺えた。

「横沢入り」は約48ヘクタールの広さを有し、典型的な里山風景が見られ、丁度稲刈りを終えた時期、稲架が青空に映えている。管理棟で昼食をとっていると、別のグループが到着し、ボランティアの方が説明している。午後は湿地植物で藺草の仲間サンカクイの茎の三角を確認し、ネムノキの花後の長い眠り、キリの成長の早さを実感した話、ガマの地下茎繁殖などの説明もあった。時折、講師は「これは何ですか」と問いかける。コウヤボウキだけは言い当てた。早速その謂れ、高野箒の時代背景にも話が及んだ。

ガマズミやマユミの赤い実が美しい。遠くから見て実の付き方の違いをサブの女性に教えられる。連携がよく、講師は次のシオデの命名由来を説明しており、写真の他に図示したもので鞍を固定する四緒手が理解できる。谷地部から尾根を登る道々も目にする草木の解説は続き、メモした名は書き取っただけで約１００種にも達した。やがて伊奈石の石切り場跡に至ると、一転して岩質の話、残っている石に見られる採掘時の痕跡が見られ、往時の苦労に思いを馳せた。それから僅かの登りで天竺山３１０ｍの山頂で三内神社の奥宮が鎮座していた。急な石段を慎重に下り、サネカズラの赤と白の実を珍しがったり、秋冷至るアジサイのがく片が下向きとなることも普段は気付かぬことであった。

伊奈石の石切り場跡

大悲願寺の境内に戻り、黄葉美しいイチョウを愛で、葉の切れ込みの多少で雄木、雌木を見分ける説明に、そうだったのかと納得。花は既に終わっていたが、シラハギの寺として名高く、伊達家との縁なども伺った。武蔵増戸駅に向かい、15時頃に着いて解散となった。

里山の紅葉かつ散る静寂（しじま）かな

（緑爽会　小原　茂延）

尾瀬保護財団ボランティアに登録して

越後支部　吉田　理一

■ボランティア応募の動機

平成28年秋「変形性膝関節症」と診断され越後駒ケ岳「駒の小屋」管理人をリタイアし、尾瀬のツァーガイドも休業せざるを得ない状況になった。

平成23年に尾瀬ガイド協会認定ガイドを取得し、退職後は年間15回前後ネィチャーガイドとして尾瀬を案内してきましたがそれも出来なくなった。

これまでのガイド活動で培ってきた知識・経験・ガイディング技術・先輩ガイドから伝授されたワザをこのままで終わらせたくない。

■ボランティアとして登録されるまで

尾瀬保護財団では毎年３月末締め切りでボランティアを募集している。

① 応募：応募用紙を財団に提出～提出期限３月31日

② 仮登録：財団で書類を審査し「尾瀬ボランティア」として仮登録。

③ 通信研修：研修資料が財団より送付される、研修レポートを作成し財団に提出。締切５月31日。

④ 現地研修：現地研修会（一泊二日）の参加。

⑤ 正式登録：７月財団事務局から尾瀬ボランティア証が交付される。

■尾瀬ボランティア登録者数

平成８年に尾瀬ボランティは募集開始され、当初は５００名以上が登録されていたが入山者数の減少や高齢化により現在の登録者数は次のようになっている。

※平成29年４月１日現在

２９３名(男性２３２名・女性61名)

平均年齢64・９歳

（最高齢87歳・最年少21歳）

都道府県別の登録者数

（平成29年１月１日現在）

群馬県	１０６名	東京都	49名
埼玉県	43名	神奈川県	29名
千葉県	29名	福島県	21名
栃木県	12名	新潟県	10名
茨城県	10名	静岡県	３名
その他	11名		

■具体的な活動内容

（28年度活動実績）

入山口啓発活動、お話ボランティア活動、至仏山東面登山道柵立て、至仏山東面登山道柵はずし、ありがとう尾瀬清掃活動、自主ボランティア活動、地域ボランティア活動、ビジターセンター支援ボランティア、事務ボランティア活動、ＮＨＫ写真展等のイベントの事務、環境学習ミニガイドツァー活動、ボランティア研修、尾瀬自然解説ガイド等と活動は多岐にわたってあるが参加は各自の任意であるので自分の予定次第で決めることが出来る。

※登録期限は２年間で更新が必要であるが２年間一回もボランティア活動をしなかった場合は更新出ないと規定されている。

私が実際参加した中から次の一点について報告する。

■尾瀬自然解説ガイド研修会

日時　平成29年8月20日(日)

会場　山ノ鼻ビジターセンター及び研究見本園、山ノ鼻～牛首三叉路。

参加者　自然解説ガイドとボランティア、尾瀬保護財団職員。

研修方法　尾瀬自然解説ガイド2～3名とお客役のボランティア3～5名を一班としてリレー形式でガイドをする。個々のガイドについて評価や感想を述べてガイドの資質向上を図る事を目的とした研修会である。

〈感想〉私自身も尾瀬ガイド協会認定ガイドとしてガイド活動をしているがかなりの違いを感じた。第一に時間に追われずゆとりを持ったガイド活動である点、次に自然科学特に地層の形成過程の解説が大変詳しい点。

〈意外に思った点〉尾瀬の自然を守ってきたこれまでの自然保護活動の歴史や意義、大切さについて私の班のガイドは一言も触れなかった事。今年はボランティア登録のための研修参加が主たる活動であったが次年度は自主的な活動を行いたい。

沼山峠ボランティア詰所

尾瀬保護財団
ボランティア腕章

◆**購読料とカンパをありがとうございます**

〈2016年度～2017年度〉敬称略

2016年度

関塚貞亭（横浜市）・田村佐喜子（松本市）・里見清子（甲府市）・石岡慎介（市川市）・舩田洋子（福井市）・

2017年度

延島冬生（小笠原村）・鈴木昭（横浜市）カンパ含む・白鳥勝治（静岡市）カンパ含む・田村佐喜子（松本市）里見清子（甲府市）・穴田雪江（東京都練馬区）・桐山裕子（藤沢市）・黒田正雄（我孫子市）・富田令子（千葉市）・鳥橋祥子（東京都杉並区）・太田義一（加賀市）カンパ含む・上田景子（栃木市）・島田稔（東京都新宿区）・石岡慎介（市川市）・福田光子（秋田市）・金井善男（上田市）カンパ含む・大口瑛司（北名古屋市）・小野寺正英（奥州市）・伊藤秀輔（広島市）・匿名カンパ・宮澤美緒子（東京都杉並区）・権藤司（安曇野市）

合計　4万9千7百円

セスすれば、位置と日時は自動入力されるので、頭数と種別（シカ/カモシカ）を入れて送信するだけです。
「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」をもう一歩進めてみませんか。

サイト URL は **https://shikadoko.jp/**
現在はスマホが電波圏内の地点でしか操作ができませんが、来年にはオフラインで入力し、圏内に入ったら自動的に送信するアプリを開発予定とのことです。

人工林(スギ)の食痕

ブナ樹皮の食痕

シカ目撃情報の操作手順（スマートフォン）

① サイトにアクセス　**https://shikadoko.jp/**
　　検索：**シカ情報マップ**
② 位置情報許可ボタン
③ 「シカ目撃報告」をクリック
④ 「シカの種類」を選ぶ
⑤ 頭数を入れる
⑥ 送信確認ボタン
⑦ 送信ボタン

シカを見たらスマホで送信！

～公益社団法人日本山岳会 自然保護委員会からの提言～

角研ぎ

自然保護委員会では、昨年からシカ問題に重点的に取り組んでいます。

昨年の自然保護全国集会（７月、高知）は、「どうする、野生動物との関わり」というテーマでおこない、三嶺のシカ害とその対策について高知大学の研究成果を学習しました。また、今年の３月に山岳７団体自然環境連絡会議（JAC 自然保護委員会はそのメンバー）は、第１回 山岳自然環境セミナーを主催し「～山の自然が崩壊する～深刻化するニホンジカの被害」をテーマにいろいろな立場の方々から意見を聞きました。現状の問題点については、一定の理解とその伝達はできつつあると思われます。今、それでは次に何をすればいいのか（何ができるのか）ということについて考え行動する時期に来ているのではないでしょうか。

11 月に国立研究開発法人森林総合研究所の岡先生からそのヒントとなる話を聞く機会がありました。以下は、その要約と行動提案です。

シカの数が増えすぎて山の環境が大きく変化している、という話を耳にすることが多くなりました。実際に山中でシカの姿を見ることも増えていますし、シカによる食痕で森の下層部がガランと空いている光景や、かつての綺麗なお花畑が姿を変えてしまった場所もあります。また、林業被害、里山での農業被害も 100 億円を超えるレベルとなっています。シカの分布域は 40 年前の 2.5 倍に増え、2050 年には 500 万頭に達して都市部以外はシカだらけ、という推計もあります。行政はシカの捕獲に向けた様々な施策を打ち出していますが、そのためにはシカの分布域とその拡大状況をできるだけ正確に把握することが大きな課題となっています。現在、森林総合研究所（国立研究開発法人）が WEB サイト「シカ情報マップ」でシカ目撃情報の収集を始めています。

会員・準会員の皆さんは登山中にシカに遭遇することがあると思います。私たちの山環境を守るために、是非ともシカの目撃情報収集に協力をお願いします。スマホでサイトにアク

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈八月度〉

報告・連絡事項

①山岳団体自然環境連絡会　8月21日(月)

＊2018年3月11日（日）第2回山岳自然環境セミナー開催企画・於代々木青少年オリンピックセンター。

②自然保護委員会　8月23日（水）19時～

＊2018年度自然観察会を6月23日～24日、三ツ峠でアツモリソウの観察会と保護活動を多摩支部自然保護委員会と合同で開催決定。

協議事項

＊2018年度自然保護全国集会開催候補地と依頼について交渉を始める。

＊自然観察会　日程と場所の検討。

〈九月度〉

報告・連絡事項

①理事会　9月13日（水）

＊2017年度・岐阜開催全国集会報告書提出。

②山岳団体自然環境連絡会　9月25日（月）

＊第2回山岳自然環境セミナー企画・講演者、他継続審議。

③自然保護委員会　9月11日(月)19時～

＊『木の目草の芽』発行・9月11日17時～

＊10月度拡大委員会参加呼びかけをする。

＊自然観察会開催　日時11月3日（日）

場所・横沢入り里山保全地域

集合場所・武蔵五日市駅改札口・10時

講師・廣田　博自然保護委員

参加費・500円

協議事項

＊自然保護全国集会開催場所候補・9月20日石川支部会議で検討を依頼する。

＊『木の目草の芽』130号編集企画。

〈十月度〉

報告・連絡事項

①理事会　10月11日(水)

＊冊子「山のエチケット(仮称)」作成の検討。注・科学委員会から協力の要請があった事項。自然保護委員会として要請を受ける。

②自然保護拡大委委員会10月29日（月）8時～10時45分　於・笹ヶ峰京大ヒュッテ

参加者・8名

＊『木の目草の芽』130号発行12月11日（月）17時～

協議事項

＊来年度の自然保護全国集会について。

開催日・2018年7月8日（日）～9日（月）

◎開催支部・石川支部主管

◎メインテーマ、基調講演と3分科会の講師の検討。

◎開催時間と時間の配分、設備など支部と調整。

『木の目草の芽』131号編集企画。

『木の目草の芽』の発行作業の省力化、印刷を外部発注等今後検討を進める。

＊自然保護委員会として携帯トイレの普及促進の提言をする。

理事会に報告をする。

＊国立研究開発法人森林研究・整備機構　岡輝樹氏のシカに関する調査協力要請の説明を委員会として受ける。11月下旬の予定。

〈編集後記〉リニア中央新幹線工事不正入札疑惑のニュースが報じられています。リニア事業は五輪後も続く魅力的な工事、との記事に、改めてこの事業の本質の一端を見た気がしました。ちょうど、来週中にでも大鹿村へ足を運びたいと思っていたところでした。次号でそのご報告ができれば。皆さま、今年も一年間ありがとうございました。　元川